

書 評

境界から思考する

——『方法としての境界、あるいは労働の多数化』が問いかけるもの

西 川 和 樹 (代表)

1. はじめに

本書が目指すのは私たちの認識の根本からの転換である。従って例えば、本書を移民研究や地域研究などといった、既存の学問分野に位置づけることは不可能である。本稿で『方法としての境界、あるいは労働の多数化』¹（以下、『方法としての境界』と表記）を読み解くにあたって、私たち筆者の一人の経験を思い起こすことから始めたい。フィールドワークの際にアメリカを訪れ、カリフォルニアのある日系アメリカ人のお宅にしばらく滞在したことがある。そこに住む日系三世の女性が、自分の歴史や自分を取り巻く社会について語る言葉は矛盾に満ちたものであった。彼女が発する、自己にまつわる「日系人はね」、「アメリカ人はね」、「日本人はね」という錯綜した語りから、日系人に関する知と認識のあり方を再考する必要性を考えるようになった。「日系人はね」と発せられる時の日系人とは一体誰のことで、そのすぐ後で続けられる「アメリカ人はね」という時の「アメリカ人」とは一体誰のことなのだろうか。その時、語る「私」はどのような位置にいて、日系人、アメリカ人、日本人といういくつかの分類を引き受ける私という主体はどのような言葉で説明されるべきだろうか。この彼女の矛盾した語りを、自己の所属について二つの国の間で引き裂かれるアイデンティティ・クライシスなどの説明で終わらせることはできない。これは私たちが自らや、自らを取り巻く社会について、いかなる認識を持つかに関わる問いであり、従って、その認識を構成する知の問題であるのだ。

日系アメリカ人に関する歴史的な記述にひきつけて考えてみる。日系アメリカ人の経験といえば必ず第二次世界大戦時の強制収容所が語られる。強制収容所経験は彼ら、彼女らの歴史の軸として設定され、1960年代のアジア系アメリカ人運動を経てアジア系アメリカ人として生きるようになった三世代の経験は、80年代に強制収容に対する補償を勝ち取った経験へと単線的につながられ、日系アメリカ人という主体が描かれてきた。日系アメリカ人が語られる時、日本とアメリカという二つの国民国家が所与のものとされ、それによって日系アメリカ人と

いう分類は、日本にもアメリカにも関係をもちながら、どちらにも完全には同一化できない存在として措定される。その際彼ら、彼女らの存在を説明する言葉遣いは、彼らが置かれた社会的、文化的状況に合わせて使い分けられる。世代論で言うならば、アジア系アメリカ人運動を経験した日系移民三世たちは、アジア系アメリカ人として突然に登場する。一方で移民二世たちを説明する言葉は、日本の精神論から創出された、**GAMAN**、**ENRYO**、といったフレーズで彼らの忍耐強さが称賛されることによって、アメリカの帝国主義に抗する姿が描かれてきた。このような分類がなされることにより、個別の経験は文脈に合わせて都合よく解釈され、それらをつぎはぎして組み立てることによって日系アメリカ人という主体が構築されてきた。彼ら、彼女らの歴史と呼ばれるのは、そのような知識の集積によって出来上がった認識の形態である。

ではこの語りを生み出してきた制度や認識、世界を統制してきたシステムとはいかなるものなのだろうか。『方法としての境界』は、このような問いを徹底して引き受ける。そしてその際の基点となるのは境界 (**border**) という概念である。本書、『方法としての境界』を読むとは、世界を構成する無数の境界を捉えるための感覚を研ぎ澄まし、私たちの認識において自明とされてきた様々な分類を批判的に辿り直すことに他ならない。

2. 本書の概略

繰り返して強調すれば、『方法としての境界』は私たちに、世界の認識の仕方の転換を根本から迫るものである。従って本書を読むということは、論点を確認しながら概略をまとめ、各論点を批判的に考察するということでは、ない。本書は移民研究、歴史研究、経済学、社会学、地域研究などの文献を援用しながら議論を進めているが、これによって本書が意図するのは、学問的な正当性を獲得することではなく、新たな認識の可能性を開くことである。同様に本書評が目指すのも、その内容を要約する作業ではなく、本書が提示する諸概念を起点にしていかなる認識の転換が可能になるかを問うことである。そして、こうした姿勢で複数の手による書評を編む行為自体が、本書を批判的に読み解く一つの方法なのだ。従って本書評では、全編を使って各章ごとの概略を説明するのではなく、本書がいかなる「翻訳」²の可能性に開かれているのかを提示したい。そのために、以下で必要最低限の本書の議論の流れを示す。

本書第一章「境界の多数化」では、ニューヨークのタクシー運転手の事例を端緒に、地理的なものだけでなく社会的、政治的、経済的など様々な境界を含め、現代世界の境界がいかに複雑に多数化しているかを述べる。ここでは、境界を地

理的なものとしてのみ捉えてしまう認識への問いかけがなされる。続く第二章「世界制作 (fabrica mundi)」では、地図製作の系譜を辿ることでこの問いへの考察を深めていく。そこで明らかとなるのは、地図製作は帝国主義の展開とともに遂行され、帝国主義の広がりとは資本主義の広がりでもあるということだ。第三章「資本のフロンティア」では資本の展開に沿って近現代史が読み直されるが、ここでも議論を通底するのは多数化という概念であり、資本の展開に付随する労働力の多数化 (multiplication of labor) が論じられる。近年の資本の変容が作り出した労働力とは、国際分業といった地理的概念におさまらない形で多数化、複雑化したものなのだ。第四章「労働の形象」では、労働力の多数化という概念を、金融トレーダーとケアワーカーという形象を通して論じる。従来の枠組みでは無関係なものと思なされるこの二つの形象は、実は現代の資本が作り出す多数の境界に曝された存在であることが明らかにされる。さらにここでは熟練・非熟練労働という区分の機能不全が浮き彫りとなる。第五章「時をもつ境界の空間にて」では、時間性という参照軸を加えながら現代の資本の性質についての議論を深める。境界は固定したものではなく、様々な権力の要請によって柔軟に変容するものであることが、境界の時間性に焦点を当てることで明らかにされる。例えば移民という主体は、国家や資本などの権力によってある時は不法移民とされある時は単純労働者とされるのだ。第六章「統治性の主権機械」では、主体の形成に関わる諸権力を分節化する。前章までは国家と資本が主体を形成する中心的なアクターとして議論されてきた。しかし本書が主体形成の権力として想定する対象は、国際機関、人権団体、軍隊など多岐にわたる。現代に生きる主体はこれら複数の諸主体が独自の法や規範を行使する中で生成するのだ。第七章ではこの新しい統治形態について、中国やインドの例を参照し論じる。これらの国では前章で挙げられた複数の統治権力が地理的、経済的、政治的な複数の境界を作り出しながら労働する主体を形成し、搾取の体制を作りあげる (中国の経済特区を思い起こすと分かり易い)。最後の二章は主体のもつ可能性を軸に展開される。ここまでの議論は、主体を形成する権力に関する分析が主だった。だが本書が描き出そうとする主体とは複数の統治権力によって一方的に管理される受動的な存在ではない。第八章「主体を形成すること」では奴隷労働やソヴィエトの労働者の例を通して、主体の形成を、その抵抗や能動性に着目し考察する。主体は多数の境界に曝される存在であると同時に、常に境界に対して抵抗し、境界の変容を通して自己を作りあげる存在である。第九章「コモンを翻訳すること」では複数の境界によって分断される主体をいかに接続するか、その可能性が考察される。その際鍵となるのは翻訳という概念であり、この概念のもつ力を引き出しながら、抵抗の可能性が語られるのである。

3. 引き直される境界

私たちは何を基礎にして他者と繋がることができるのだろうか。国民、市民、労働者、男性、女性。私たちは様々な共通項を手掛かりに、この問いに応答しようと試みる。しかし本書、『方法としての境界』が把握する世界——複数の境界が身体の上に刻まれ、無数の主体が立ち現われる——では、そうした分類を基礎に人々が繋がり合うことは不可能だと思い知らされる。例えば労働者という主体は、国家や資本など様々な統治主体の要請によって無数に断片化される。彼、彼女は境界によって熟練労働者と非熟練労働者へと分けられ、さらに非熟練労働者の中にも境界が引かれる——彼、彼女の非熟練労働者としての位置は一時的なものなのか、それとも抜け出す見込みのない永続的なものであるのか。さらにその労働者は下層階級出身者か、移民労働者か、不法滞在の労働者か、あるいは男性か女性か。労働する主体は常に複数の境界によって境界づけられた存在である。本書が主張するように、現代の世界は、「労働者」を含め、ある共通のアイデンティティを基礎にして連帯を作り出すことが不可能な状況にある。では現在、どのように抵抗の基盤となる新しい共同性を構築すればよいのか。このような問いを引き受ける本書は、既存の分類を問いに曝すことにより、現代の世界を認識する新たな視座を提示している。

既存の分類の不可能性は、地理的な境界についても当てはまる。国民国家の生成、植民地主義の展開、冷戦、ポストコロニアル。近現代の歴史を通して、世界は常に変容の過程にあり、その途上で地理的な境界は幾度となく引き直されてきた。さらに、過去数十年の国民国家の変容、EU、NAFTA、ASEANなどの新しい種類の共同体、また南スーダンの独立やウクライナ情勢など、近年の世界の変化を念頭に置くだけでも、境界の変容には経済的、政治的、社会的なものが係っていることに気付かされる。そして絶えず境界が引き直されるその時間、その場所で、今を生きている人々が存在する。国民国家が未だ現代の世界のあり方を強く規定するにしても、境界を単に国境のみに限定する認識に頼って、そうした人々の存在をどれだけ表現できるだろうか。また、国民国家という概念だけでは把握しきれない世界があるとするならば、それを基点としたインターナショナル、トランスナショナルなどの概念はどこまで有効性を持ち得るものなのだろうか。またグローバル・スタディーズや地域研究といった学問分野は国家という枠組みにどこまで批判的であり得るのだろうか。

4. 地域研究を問い直す

筆者のうち一人は沖縄の住民運動を研究しているが、沖縄という島を考えるうえで、地域研究の枠組みに不足を感じる事が少なくない。そしてその際に求められる認識の転換は、『方法としての境界』が提示する認識論に深く共鳴するものだ。現在の沖縄という場所は、日本帝国の時代から米帝国のグローバルな軍事主義が展開する冷戦期にかけて、境界が何度も引き直される中で生まれた。戦後の米軍占領、それに付随する基地経済、天下りの民主主義という様々な矛盾の中で、日本の中心に対する周辺と位置づけられたこの島では、本土復帰・冷戦後も軍事的拠点とされたがゆえの基地被害や基地をめぐる対立が続いている。そうした状況の中でそこに生きる主体もまた複数の境界に曝され、ある場合には移民・低賃金出稼ぎ労働者として様々な移動を経験することになった。本書は地域社会を描く際の既存の認識の再考を迫り、地域が抱え込む無数の境界や、その場所に関わる人々が作り上げる関係性について新たな視点をもたらした。とりわけ、境界が複雑に入り組んだ地域の記憶を記録することをめぐって、本書は、主体の生成、それに関わる対立や闘争、翻訳の可能性、新たな共同性といった新たな諸概念を精緻化しながら、「沖縄問題」を根源的に捉え返すための視座を与えてくれる。

沖縄戦の戦禍を受け、家屋・遺産、住民生活に関する資料が散逸・消失し、壊滅的な打撃を受けた沖縄における地域史誌において、人々は自身の歴史をいかなる認識において記述してきただろうか。その編纂を担う編集委員や地域研究者は、資料収集や人々の暮らしにおける感情及び利害から発せられる語りを記録し代弁することもある、いわば翻訳者の立場に立つ。複数の翻訳者の手を経て編纂された沖縄の地域誌とは、一体誰のものなのだろうか。例えば、沖縄からブラジル、大阪、ハワイへと移民した人々の経験を含むこととなる地域史の編纂は、対象とする地域自体の意味を問い直すことになる。移民した先でも、元居た場所との縁や心情的紐帯はなくなり、むしろ移動する主体はあらゆる場所に「沖縄」を持ち込むだろう。また移民は往々にして、何世代かを経た後に島へと帰ってくることもある。土着の記憶を綴る地域史の編纂作業は、こうした移動を続ける人々と島に留まる人々、本島と離島間の移動を関連付けながら、「地域」という言葉から一般的には排除される流動性や広がりを描くことでもある。

だからこそ、地域社会の暴力的な変容を経験した同地において、地域史誌の編纂は、「どこにも書かれていない」自分たちの過去を辿り直し、自分たちの経験を翻訳する作業となり得るのではないだろうか。そして、その過程で、同じ言語

や経験を共有しない者同士が出会い、時には対立をはらみつつも、翻訳を通して新たな共同性を見出す取り組みと位置づけられるのである。こうした営みの積み重ねは、研究対象をまず国家や地域的な境界で囲い込む、従来の地域研究の枠組みにはおさまらないだろう。『方法としての境界』が批判するのは、そうした単純化であり、重要なのはそれぞれの主体に刻み付けられている無数の境界を丁寧に辿り直し、そのような主体を作り出す権力を分節化することである。

5. 資本が生み出す境界

現代を生きる人々を統治する権力主体として、本書が国家と並んで重要視するのは資本の働きである。ギャヴィン・ウォーカーは、本書の共著者の一人であるサンドロ・メッツァードラの議論に関わって以下のように述べる。「境界の超克と複数化が同時に進行する今日の現象は、国家とそのすべての形式（国家を基礎づけるために「国民」や「民族」の形象を必要とし、「国民」へのこうした圧力から国民言語を管理する技術へととり込み、国家自体を脱臼させ再建する力）と、資本による止むことのない地球の囲い込みとの交換もしくは交通によらずしては、理解することができない³」。ウォーカーが指摘する通り、絶えず変容を遂げる世界を理解するためには、国家と資本の複雑な相互関係を考慮しなければならないのであり、この論点は『方法としての境界』においても共有されている。

例えば再び沖縄の事例を挙げて述べると、米軍占領期の沖縄・八重山諸島の石垣島ではパイン産業が発展し、それに携わる多くの労働者が集まった。パイン栽培や加工場での労働には、石垣島の地元民、戦前期に台湾から石垣島へ移住してきた人々、沖縄本島や宮古島などからの流入者、外地引揚者⁴、パイン産業の発展に伴ってやってきた台湾人労働者や韓国人労働者など、様々な人たちが従事することとなった。これらの労働者たちには、戦前期にハワイやパラオ、フィリピン・ミンダナオ島などへの移民経験を持つ者が含まれており、また台湾人労働者も「台湾人」と一括りにできる存在ではなく、東南アジアや香港、中国本土に出自を持つ人々が含まれていた。これらの人々は出身地域の分類によって「台湾人」などと認識される存在であると同時に、「労働者」として認識される存在でもある。彼らはパイン産業の要請に従って、単純作業者、熟練技能者、季節労働者などと分類され、その地に留まる者もいれば、一時的な滞在の後ほかの場所へ移動する者もいる。パイン産業に携わる労働者たちに刻み付けられる境界はいずれも資本に関連するものであり、資本によって「労働者」という主体が生み出されたのである。

国家と資本による労働者の生成という主題はすでに南北問題や労働の国際分業

という言葉によって語られてきたかもしれない。しかし、『方法としての境界』が論じるように、現代のグローバル資本によって要請される労働者の実像は、地理的な分割を起点にした概念では説明しきれない。例えば本書が挙げているのはインドで専門的な教育を受けた IT 労働者の例で、彼らは熟練労働者としての技能を持つにもかかわらず、欧米諸国へ移住する際はすぐに仕事が見つからず、タクシー運転手のような非熟練労働者として雇用される⁵。こうした状況は移民政策を管理する国家と労働力を調整する資本、双方による要請の結果であるが、時には非熟練労働者となり、またある時には熟練労働者となる流動的主体を、従来のような技能に基づく二分法で区分することは最早できない。また彼らは、滞在する国家の状況次第で、移民労働者にも、不法労働者にも、市民にもなり得る。こうした現状を捉えるために、『方法としての境界』は時間性という参照軸を用いた。労働者はある期間の中で様々な主体に差異化されるが、これはインドの例に限らず、あらゆる労働に対して起きているのだ。国家と資本が作り出す時間性の中で、各々が抱え込む差異は無数に増殖する。この無数化された労働者の姿こそ、本書が労働力の多数化という言葉で言い表すものである。

6. 翻訳が生む共同性

『方法としての境界』が提示するのは、複数の境界によって無数の主体が現れる世界であるが、本書が繰り返し強調するように、主体は境界づけられるだけの受動的な存在ではなく、闘争を通して新たな共同性を作り上げる存在でもある。そして本書が別の主体化への契機をつかもうとするのは、翻訳という概念においてである。「翻訳は新しい形の組織や社会制度を作り出すうえで、鍵となる役割を果たしうる⁶」。本書がいう翻訳とは、言語的な翻訳よりも広義であり、政治的、文化的、社会的な実践を含むものである。翻訳を言語的なものだけでなく、社会的、文化的なものと捉えた『方法としての境界』において、あらゆる行為は一つの翻訳である。そして、ある行為を別の行為に翻訳し返し、それによってある種の共同性を作り出していく瞬間に、同質性を前提とする連帯とは違った抵抗の可能性が見出される。

翻訳に関して本書が議論を行うのは、奴隷貿易船に奴隷として乗せられた人々の事例や現代の中東諸国での移民労働者の事例である⁷。中東の産油国で外国から移民労働力を受け入れる企業は、労働者の組織やストライキが生じないように、異なる地域、言語、文化、民族的背景を持つ労働者を注意深く集めている。同様に、歴史的にみると、奴隷貿易の時代も奴隷として連れてこられてきた人々が抵抗運動を組織しないように、異なる出自を持つ人々を一つのグループとした。し

かし、このような状況においても、翻訳によってある共同性が生まれ、抵抗が組織される。「多くの奴隷貿易従事者はこの戦略が失敗して失望することとなった。なぜなら奴隷たちは即興や順応を容易に行って、奴隷船にいるときでも共通言語を作り上げる翻訳を行ったからである。それによって抵抗の機運が生まれ、反乱が組織される原因ともなった⁸」。

さらに同書は、酒井直樹の議論を援用しながら、翻訳をさらに分節化する⁹。なぜなら「議論すべきなのは、翻訳がどのような社会関係を打ち立て、どのように社会関係を変容させるか¹⁰」であるからだ。酒井が均質言語的な聞き手への語りかけの構え（homolingual address）と呼ぶものにおいて、発話行為は、均質的で閉じられており、従ってある前提を共有した聞き手に向かって行われる。反対に、異言語的な聞き手への語りかけの構え（heterolingual address）において想定されるのは、発話者の持つ前提を共有しないかもしれない異質な聞き手であり、このような場では「相互的な理解や透明な伝達がまったく保証されていない¹¹」。『方法としての境界』の著者は酒井の翻訳の議論を資本との関係について読み替えながら、様々な行為や生のあり方が資本によって翻訳され、均質な価値体系へ変換される様は、均質言語的な聞き手への語りかけの構えによる主体の形成——われわれと他者の暴力的な分割——に共通すると指摘する。この指摘から想起されるのは、近年ことに実感される排外主義の展開であろうか。民族や国家という差異に沿って「われわれ」を再構築する排外主義は、暴力において境界を構築し、均質な空間の維持、生産を図る行為として位置づけられる。だからこそ、翻訳において生じ得る関係性や可能性を現勢化し続け、異言語的な聞き手への語りかけの構えを獲得することが現在、求められているのだ。

7. 結論にかえて—研究すること

本書は、国家と資本による空間、時間、人々の囲い込みがグローバルに同時進行する今日の世界から、別の場所や結びつきを模索していくにあたり、闘争や抵抗をともしなう主体の生成及び、そこに生起する翻訳行為の可能性が描き込まれた稀有な見取り図である。何度も述べてきたように、境界から思考することとは何よりも、別の空間や共同性を模索するうえでの知や認識の問題に係る。なかでも本書が用いた翻訳という概念は、新たな共同性への契機になり得るとともに、研究する意味や研究対象との関係性について問い続けることの意義を提示する。著者たちのジェノバでの反人種主義運動や、ハイチの政治不安定化による移民問題への関わりに端を発して生まれた本書は、境界についての理論であると同時に、現場と理論の新しい繋がりを可能にするのだ。

現場と理論を往還する著者が述べるように、「成功していようとそうでなかろうと、すべての闘争には決して抽象的な数式に陥らないような理論的瞬間が存在する。……これらの闘争の関係を辿るためには共同性を翻訳する作業に適した理論的な言語が必要なのである¹²」。つまり、現場に集まる人々が共に言葉を模索する時、境界によって無数に増殖する差異にもかかわらず、新たな共同性を翻訳する可能性が生まれるのだ。理論とは、別の主体化を可能にする翻訳に賭け続けることであり、そうした翻訳が行われる場所が現場である。そして、そのような現場に立ち続ける私たちは、翻訳不可能なものを常に抱え込まざるを得ないだろう。

しかし、本書が示すように翻訳不可能性こそが鍵である。それは、「単なる障壁なのではなく、強い社会関係の結節点」でもあるのだ¹³。翻訳不可能なものは、翻訳行為の前には存在しない。決して分かり易くはない書かれ方をした本書を読む行為自体が一つの翻訳行為であろう。本書の提示する認識は、翻訳不可能なものを巻き込みつつも今後様々に生み出されるであろう無数の主体と出会うことを可能にし、新しい社会性、そして未来に遭遇する契機となるのである。

注

- 1 Sandro Mezzadra and Brett Neilson, *Border as Method, or the Multiplication of Labor* (Duke University Press, 2013). 日本語タイトルは北川真也訳の下記論文に依拠した。サンドロ・メツァードラ、ブレット・ニールソン（北川真也訳）「方法としての境界、あるいは労働の多数化」『空間・社会・地理思想』13（2010）、51-59。同論文は、本書が出来上がる前に書かれた草稿段階の論文であり、「この論文は、私たちが現在行っているより大きな研究プロジェクトの概略として読まなければならない」（51）とある。その研究成果が一冊の本として刊行されたのが本書である。
- 2 本書評は5名の筆者が共同で執筆した。書き上げる過程で、私たちは研究会を重ね、本書の提示する認識への議論を深めた。それは、互いが個別に持つ研究主題を本書の議論に沿って読み替える経験でもあり、本書評はそうした議論の痕跡である。もちろん、思考や文章を一つにまとめ上げる過程で共有されたのは、それぞれが抱える研究課題の一部に留まるだろう。だがそれ以上に、ある主体が開かれ、壊され、変容する過程の中で言葉を作り上げていく様相は、本書の主題の一つでもある、「翻訳」を通した新たな共同性の創出を予期させるものであった。
- 3 ギャヴィン・ウォーカー（葛西弘隆訳）「現代資本主義における「民族問題」の回帰——ポストコロニアル研究の新たな政治的動向」『思想』1059（2012）、142。
- 4 沖縄県農林水産部「第六部 バイナップル」『沖縄県農林水産行政史 第四巻（作物編）』（農林統計協会、1987）、312。
- 5 Mezzadra and Neilson, 137.
- 6 Mezzadra and Neilson, 21.
- 7 Mezzadra and Neilson, 274-276.
- 8 Mezzadra and Neilson, 274.
- 9 Mezzadra and Neilson, 281-283.

10 Mezzadra and Neilson, 281.

11 酒井直樹『日本思想という問題 翻訳と主体』（岩波書店、1997）、8。

12 Mezzadra and Neilson, 277-278.

13 Mezzadra and Neilson, 308.

執筆者 西川和樹（代表）
安里陽子
桐山節子
小路万紀子
高橋侑里

Abstract

Thinking on Border —The Problematique of Border as Method or, the Multiplication of Labor

Kazuki NISHIKAWA, et al.

In a significant book, *Border as Method, or the Multiplication of Labor* (Duke University Press, 2013), Sandro Mezzadra and Brett Neilson provide us with a revolutionary view about border; every subject is exposed to multiple borders of, say, nation, race, gender, and language. Border is not just territorial one but also social, cultural, or national one, and therefore recognizing border just as the device of forming the nation-state is too simple to comprehend the contemporary world. With this thesis, the book engages in the creation of the new concept, such as struggle, translation, and common, in order to grasp the subject living in the contemporary world where the nation-states, capital and other governmental agencies assemble. In a word, the book forces us to transform the way we comprehend people and the world around us.

The book adopts multiple frameworks of disciplines; sociology, economics, area studies, and so on. However, the purpose of this is not to authorize itself but to open the new framework which establishes another dimension of discussion. Similarly, in this article what we intend is not to summarize the whole discussion of this book, but to seek for the possibilities that the book allows us to see. That is, we believe, to read critically *Border as Method*.

We begin with the discussion on area studies by using examples of American studies and Okinawan studies, each of which authors of this article specialize. Part of the significance of this book lies in the fact that a view provided by this book challenges the existing framework of area studies. In area studies, a certain area is taken for granted; there is, for example, American studies and Asian studies. However, as *Border as Method* argues that thinking just of territorial border is too simple, there is much to be missed when we uncritically follow the framework of area studies and consider territorial borders pre-given. Taking social, cultural, and economic borders into consideration, we critically trace the limit of area studies.

Then we move through an analysis of power, which *Border as Method* puts

emphasis on; agencies which exercise power are also multiplied. Even though the nation-state still remains of great importance in analyzing the power, it is capital which plays a significant role in producing the subject. The relationship between the nation-state and capital is so complicated; both work for the similar purpose sometimes and at other times each follows a different trajectory. As a result, the multiple subjects are produced and this is the phenomenon the book names the multiplication of labor. By drawing examples from the book as well as continuing discussion on Okinawan studies, we carefully describe the complicated relationship between the nation-state and capital.

Although several agencies including the nation-state and capital have a significant influence on people living today, the subject itself, the book argues, is far from being passive one; bordering comes with struggle against it. With the concept of struggle, *Border as Method* tries to grasp the possibilities of negotiation between people and power, allowing the positive interpretation of the subject. Also important is the concept of translation, which enables the multiple subjects to connect each other and thus creates the new form of common. In the last part of this article, we engage in the discussion of how the concept of struggle and translation can be the key concept for people living today. In the end, we come to a conclusion that to think on the border is to challenge the existing framework of academic disciplines, raising the fundamental question of the way we get involved in the practice of knowledge.